

大学生におけるコミュニケーション手段の選好と シャイネスとの関係

風 間 雅 江*

I 問題提起

現代社会において、青年のコミュニケーション能力の低下が指摘されるようになって久しい。大学という教育の場でも、さまざまな場面で適切なコミュニケーション行動をとることが困難な学生が少なくない。大学生のコミュニケーションの問題は学内での生活範囲に留まらず、家族を含めて身近な人間との意思疎通も難しくなり心理的苦痛を訴える学生もあり、大学生の精神的健康を保つうえで、他者との円滑なコミュニケーションの果たす役割は大きい。

さらに、大学卒業後に就職するにあたって、多くの分野で新卒者が豊かなコミュニケーション能力をもっていることが求められており、大学教育でいかに学生のコミュニケーションのスキルを向上させるかは重要な課題である。

ところで、近年急速に普及した携帯電話によって、大学生のコミュニケーション行動は普及前とは異なる様相を示している。大学構内では携帯電話でメールや通話をしながら歩く姿がいたるところで見られ、講義時間ですら教員に注意されるまで携帯電話を手放さない学生がいる。携帯電話が常に手元にないと不安と言う学生も多い。

こうした、携帯電話が日常的なコミュニケーション・ツールとして生活に浸透している状況では、対人コミュニケーションの経路として、対話より携帯電話が優先する側面が増えているのではないかと推測される。近年指摘される大学生のコミュニケーション能力低下には、他者と直接対面して、言語的・非言語的両方のメッセージをやりとりしながら会話をしている経験の不足によるところがあるのではないと思われる。

三浦・大賀・土井・山田(2008)は、20～49歳の2083人を対象に、対人コミュニケーションにおける対面およびメディア利用コミュニケーションの選好についてweb調査を実施し、その調査結果から参加者を、対面選好タイプ、メディア使い分けタイプ、携帯メール選好タイプの3群に分けた。参加者全体に対して占める比率は、対面選好タイプが35.7%、メディア使い分けタイプが36.9%、携帯メール選好タイプが27.4%で、メディアとして携帯メールを選好するタイプには、女性・未婚者・若年層が多いという結果であった。この研究知見から三浦らは今後メールへの選好性が増していく可能性を指摘している。

もし上で指摘されたようなメールを選好する方向に進むのであれば、対面コミュニケーションの機会はより減少し、大学生のコミュ

*人間福祉学部福祉心理学科

ニケーション力の問題は益々深刻になっていくことが予測される。こうした社会背景において大学生のコミュニケーション能力の向上を図るには、現代の大学生のコミュニケーション行動の実態を調べ、その特徴を明らかにすることや、彼らのコミュニケーション行動にかかわる要因を検討することから有効な手がかりが得られると思われる。

本研究では、コミュニケーション行動のさまざまな側面のうち、コミュニケーション手段の選好に焦点をしぼり、コミュニケーション・ツールを介しない直接コミュニケーションとしての対面会話、コミュニケーション・ツールを介する間接コミュニケーションとして携帯電話の通話、および携帯メールの3種類のコミュニケーション手段を、異なる状況や異なる相手でどのように使い分けしているのかについて質問紙調査によって調べた。コミュニケーション行動に影響を与える要因の一つとして性格特性が挙げられるが、本研究では「シャイネス (shyness)」に着目し、コミュニケーション手段の選好とシャイネスとの関係について質問紙調査で得られた結果の分析を通して検討した。

シャイネスについては1970年代以降Stanford大学でZimbardoがさまざまな調査研究を展開したが、その中でZimbardo自身はシャイネスの定義を明確にしていない。こうした構成概念のあいまいさを指摘したうえで、Leary (1983) は、シャイネスを、対人的な評価に直面したり、あるいはそれを予測することから生じる対人不安、および行動の抑制によって特徴づけられる情動的-行動的症候群と定義している。

シャイネスの概念規定をめぐる議論のなか

で、「状態シャイネス (state shyness)」と「特性シャイネス (trait shyness)」とを区別すべきであるという主張がある。状態シャイネスとは、ある特定の社会的状況の中でのみ生起するものであり、一方の特性シャイネスは、特定の社会的状況を超えて個人内に比較的安定して存在する一種の人格特性とみなされるものであり、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつとしていられる (相川, 1991)。相川 (1991) は、シャイネスを、「内気」、「はずかしがり」、「引っ込み思案」、「てれ屋」、「はにかみ」などの意味を全て含む上位概念として用い、上の二つのうち後者の特性シャイネスを測定するための尺度を開発している。

ところで、シャイネスを、社会恐怖 (social phobia) と関連づけ、両者は社会不安 (social anxiety) の程度の違いにおいて連続線上にあり同じ軸で捉えられるという見方がある (Lane, 2007)。Lane (2007) は、高いシャイネスが回避性人格障害 (avoidant personality disorder) の一つの要素となっていることを指摘している。アメリカ精神医学会の診断基準 DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000) をみると、たしかに社会恐怖の診断的特徴の第1に「恥ずかしい思いをするかもしれない社会的状況または行為状況に対する顕著で持続的な恐怖」とあり、さらに、回避性人格障害の診断基準の要素のなかにも「恥ずかしいことになるかもしれないという理由で、個人的な危険をおかすこと、または何か新しい活動にとりかかることに、異常なほど引っ込み思案である。」という項目が記載されている。ただし、社会恐怖も回避性人格障害も、DSM-IVでは上の項目以外

にも社会生活上支障をきたすようないくつもの状況が同時に生じて初めてその診断に該当することになるのであり、シャイネス単独の要素だけで診断が決まることはない。

Crozier (2001) は、社会恐怖の場合はシャイネスに比べてより強烈な不安が伴うものであり、両者は情緒的反応 (emotional reaction) の程度による違いである可能性が存在することを指摘する一方で、シャイネスの程度が高じて社会恐怖に至るというよりは、他の性格次元がその間に介在する可能性のほうが高いと自身の内観および経験を添えながら主張している。またその理由となる調査知見として、シャイネスについては、Stanford study においてアメリカ国民の約50%が自分自身を shy であると自己認識しているほど一般的であるのに対して、アメリカで1990年から実施された大規模なメンタルヘルス調査である National Comorbidity Study (NCS) では8000人以上の調査対象者のうち、社会恐怖の出現率は約8%、生涯有病率は約13%と、シャイネスと社会恐怖の間の出現率の違いが大きいことを挙げている (Crozier, 2001)。シャイネスと社会恐怖が連続線上にあるか否かという問題は慎重に検討されるべきであるが、いずれにしても、両者は共に社会不安が伴うという点で共通している。もしシャイネスそれ自体がネガティブな特性ではないとしても、シャイであるために適切な自己表現ができず、日常生活で不利益を被ることが積み重なれば、それに伴って精神的苦痛が増大することになる。

日本では特有の文化的背景のもと、シャイネスはむしろ慎重深さや恥じらいといった肯定的ニュアンスを含み、欧米に比べると個人

の生活に及ぼすマイナスの影響が少ないという見方もある。しかし、児童・生徒を対象とした調査結果では、高いシャイネスは、学級への適応に望ましくない影響を及ぼすという知見が示されている (菅原・眞栄城・菅原・天羽・詫磨, 2002)。さらにこの研究によると、学級適応にマイナスの影響を及ぼすのは、シャイネスを構成する要素のうち、「対人場面による不安感」よりも、「対人行動の消極性」であるとされている。

職業生活に及ぼすシャイネスの影響について、高柳・田上・藤生 (1998) は教師を対象に、シャイネスの自己評価と対人行動との関係について調査している。高柳ら (1998) によると、全国の教師250名のうち6割以上が自分をシャイであると認識し、そのうち約2/3がシャイであるために職務上困った経験を有し、特に、教師自身がシャイネスを否定的に捉えている場合に対人関係に支障をきたす傾向があることが示された。

以上からすると、子どもの学校生活から大人の職業生活に至るまで、シャイネスが個人の生活に重要な影響を及ぼすということは明らかである。鈴木・山口・根建 (1997) は、シャイネスに対する臨床心理的アプローチの適用を念頭においたうえで、従来、主に感情と行動の2つの側面から捉えられてきたシャイネスを、新たに認知の観点を導入して捉えようとした。鈴木らはシャイネスを「社会不安の下位概念であり、主として随伴的な対人場面に生じるもの」と定義したうえで、認知、感情、行動の3つの側面から特性シャイネスを測定する尺度として、「早稲田シャイネス尺度 (WSS; Waseda Shyness Scale)」を作成した。鈴木らは、社会恐怖をシャイネス

が極度に進んだ状態として捉え、社会恐怖の臨床群のデータも健常群のデータと合わせて収集し、それらを分析した結果から、本尺度の臨床的妥当性を確認している。

先に述べた、携帯電話を含めたコミュニケーション・メディア利用の浸透も相まって、シャイネスが高い大学生は、対人不安が高いことから、直接相手と対面して話す状況で想定される対人緊張を避け、コミュニケーション手段として、対話よりも携帯電話のメールや通話を好んで用いる傾向があるのではないだろうか。

本研究では、大学生のコミュニケーション行動の一側面としてコミュニケーション手段の選好の特徴を把握し、シャイネスの高低によってそれがどのように異なるのかを明らかにすることを目的とする。調査対象者の大学生に、異なる相手や異なる状況ごとにどのようなコミュニケーション手段を用いるかを問う質問紙と合わせて、シャイネスについて臨床的観点からの検討がなされている上述の鈴木ら（1997）の早稲田シャイネス尺度を併せて実施し、両者の結果の分析を通して、大学生のコミュニケーション行動の特徴の一端を客観的に把握すると共に、それにかかわる性格特性や、コミュニケーション能力向上をめざすうえで配慮すべき点などについて考察した。

Ⅱ 方 法

1. 参 加 者

2007年6月上旬に札幌市近郊の私立大学において筆者担当の心理学の受講生を対象にアンケート調査を行った。全参加者数は148名で、記入もれ等のあった12名を除いた有効回

答人数は136名（男性60名、女性76名）、有効回答率は91.9%であった。参加者の専攻は、介護・福祉・心理学関連であり、学年は1年次が主で111名、2年次が11名、3年次が10名、4年次が4名であった。

2. 質問紙内容および手続き

本研究で用いた質問紙は、アンケート1として、異なる状況、異なる相手に対して、携帯電話を用いたメール（以下、「メール」とする）、携帯電話を用いた通話（以下、「通話」とする）、対面での会話（以下、「対話」とする）の3種類のコミュニケーション手段をそれぞれの程度用いるかを問う81項目、および、コミュニケーション手段の選択についての自由記述項目3項目、アンケート2として、早稲田シャイネス尺度25項目であり、これら2種類のアンケートを綴じたものを作成して用いた。上記の授業時間の一部を用いて質問紙を配布し集団式で行い、各自のペースで記載してもらい終了時に一斉回収した。

アンケート1では、異なる状況として、(1)伝える必要のある連絡事項ができた時、(2)謝罪をする時（急なキャンセルや借りた物を壊してしまった時など）、(3)悩み事や真剣な話題の時、(4)嬉しかったことや楽しかったことの話の時、(5)用件のない、あるいは他愛のない話題の時、(6)自分の気持ちを正確に伝えたい時、(7)気楽にコミュニケーションをとりたい時、(8)コミュニケーションで安心感を持ちたい時、(9)相手が何をしているか知りたい時、の9種類の状況を設定した。異なる相手としては、(1)友人、(2)家族、(3)目上の人を3種類を設定した。

参加者には、上記の各状況および相手ごと

に、メール、通話、対話のそれぞれについて、「全く使いたくない」、「使いたくない」、「どちらでもない」、「使いたい」、「非常に使いたい」の5つの選択肢からあてはまるものを1つ選んで○をつけるよう求めた。

アンケート2の早稲田シャイネス尺度の25項目については、Table 1に全項目を示した。作成者の鈴木・山口・根建（1997）の原著論文では、この尺度において5つの因子が抽出され、因子1行動<積極性>、因子2感情<リラックス>、因子3感情<過敏さ>、因子4認知<自信のなさ>、因子5認知<不合理的な思考>と命名されている。本論文では、宮本（2001）が上記著作権者の許可を得て変

更した表記に準じ、因子1を行動<積極性>、因子2を感情<緊張>と呼ぶことにする。

調査時には、参加者に対して、項目ごとに「まったく当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「どちらともいえない」、「だいたいは当てはまる」、「ぴったり当てはまる」の5つの選択肢のいずれかに○をつけるよう求めた。後の分析では、「まったく当てはまらない」1点から「ぴったり当てはまる」5点までの評価点に換算した。逆転項目については換算時に粗点を反転させたものを評価点とし、25項目の評価点の合計をシャイネス得点とした。

Table 1 早稲田シャイネス尺度の質問項目

因子1 行動<消極性>

私は人と広くつきあう方だ。(逆転項目)
自分から進んで友達をつくることが多い。(逆転項目)
知らない人と知り合いになるチャンスは生かすようにしている。(逆転項目)
私は異性とよく話す。(逆転項目)
初めての場面でもすぐうちとけられる。(逆転項目)

因子2 感情<緊張>

人前に出ても冷静でいられる。(逆転項目)
対人的な場面で赤面するようなことはほとんどない。(逆転項目)
評価されるような場面で手や足がふるえることはほとんどない。(逆転項目)
対人的な場面で緊張し、心臓がドキドキすることが多い。
私は社会的な場面でいつも落ち着いてくつろいでいられる。(逆転項目)

因子3 感情<過敏さ>

人と会話をしているとき神経過敏になることがよくある。
気楽な集まりでも異性があると神経過敏になったり、緊張したりすることがよくある。
人と話をしているとき気が散って考えがまとまらないことが多い。
個人的な質問をされるとうまく答えられず、声をつまらせてしまうことがある。
対人的な場面で自分自身のことについて過敏に注意が向くことが多い。

因子4 認知<自信のなさ>

私には人に好かれるような魅力がほとんどない。
他の人は私と一緒にいては不愉快にちがいない。
他の人は私を無能な人間だと思うにちがいない。
会話などで話題がとぎれてしまうのは、いつも自分の方に責任がある。
私が内気なのは生まれた性格だから変えられない。

因子5 認知<不合理的な思考>

私は会う人すべてから好かれ、受け入れられなければならない。
私は他の人と同じようにたくさん話すことができなくてはならない。
デートの申し込みのように人に何かをたのんだ時、断られるのはみっともないことである。
人に自分の欠点を見つけられるのは、恐ろしいことだ。
初対面の人とよく会話できなくても問題ではない。(逆転項目)

Ⅲ 結果と考察

アンケート1では、3種類のコミュニケーション手段のそれぞれについて「全く使いたくない」を1点、「非常に使いたい」を5点までの評価点に換算し、異なる相手ごとに9種類の状況の得点を合計し、これを「コミュニケーション選好度」とした。9種類の異なる状況別の差異については別稿で検討することとし、本稿では9種類全ての状況を合計して扱うこととした。また、異なる相手のうち、「家族」は自宅生であるか否かによる差が想定されたため、本稿では「友人」および「目上の人」のみを比較分析の対象とした。

アンケート2では、早稲田シャイネス尺度全25項目の評価点の合計をシャイネス得点として算出した他、5つの因子ごとの合計得点も求めた。

参加者全員のシャイネス得点の平均値、および男女に分けたそれぞれの平均値を算出したところ、全員の平均値は71.09 (SD=13.50)、男性の平均値は72.00 (SD=13.13)、女性の平均値は70.37 (SD=13.83) で、男女のシャイネス得点の間には統計的有意差は認められなかった ($t=0.70$, $df=129.49$, $n.s.$)。欧米でもシャイネスの尺度を用いた調査では男女間の差は認められておらず (例えば, Crozier, 2005)、本研究でも同様に性差によるシャイネスの差はみられなかった。

鈴木・山口・根建 (1997) による本尺度の健常群の平均値は68.37となっており、これを基準とし、この数値を下回る49名をシャイネス低群、参加者全体における得点の上位49名をシャイネス高群とし、それぞれの平均値を Figure 1 に示した。平均シャイネス得点

は、シャイネス高群で83.98 (SD=8.39)、同低群で57.47 (SD=8.97) であり、両群の差は有意であった ($t=15.11$, $df=96$, $p<.0001$)。

コミュニケーション選好度を従属変数とし、シャイネス (高・低の2水準)、コミュニケーションの手段 (メール、通話、対話の3水準)、コミュニケーションの相手 (友人、目上の人) の2水準) を要因とした3要因の分散分析を行った。その結果、シャイネスの主効果は認められず ($F(1, 96) = 1.39$, $n.s.$)、コミュニケーションの手段の主効果、および、コミュニケーションの相手の主効果が有意であった (前者は $F(2, 192) = 25.89$, 後者は $F(1, 96) = 54.44$, 共に $p<.0001$)。交互作用は認められなかった。シャイネス高群、シャイネス低群共に、相手が目上の人よりも友人のほうが、全てのコミュニケーション手段において、コミュニケーション選好度が高く (両群共に $p<.001$)、多重比較の結果、コミュニケーション手段において、対話がメールおよび通話より有意に選好度が高かった (両者共に $p<.001$) (Figure 2)。

相手ごとに分けて検討してみると、相手が

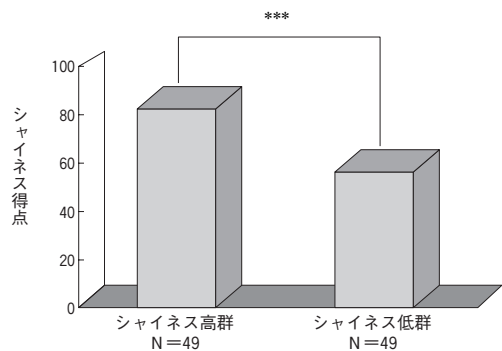


Figure 1. シャイネス高群および低群のシャイネス得点平均値。

*** $p<.001$

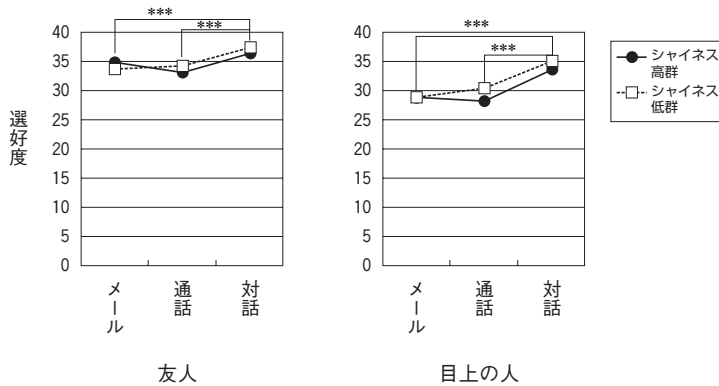


Figure 2. 異なる相手ごとの各コミュニケーション手段の選好度。
*** $p < .001$

友人の場合、シャイネス高群では、対話の選好度の平均値が36.45で、次いでメール34.43、通話33.08と続いた。シャイネス低群でも、対話の選好度が最も高い点は高群と共通していたが ($M = 37.27$)、それに続いて選好度が高いのは通話であり ($M = 34.22$)、これにメールが続いた ($M = 33.37$)。統計的検定ではシャイネスの高群と低群との間の有意差はなく、両群共に選好度において、対話と通話、対話とメールのそれぞれの間に有意差が認められた (両者共に $p < .001$)。

相手が目上の人の場合、シャイネス高群では、対話の選好度の平均値は33.73、メー

ルが28.69、通話が28.14であった。シャイネス低群でも、対話の選好度が最も高い点は共通しており平均値は34.86、次いで通話30.45、メール28.31と続いた。友人の場合と同様に目上の人相手の場合も、シャイネスの高群と低群との間の有意差はなく、両群共に選好度において、対話と通話、

対話とメールのそれぞれの間に有意差が認められた (両者共に $p < .001$)。統計的な有意差は認められなかったが、3つのコミュニケーション手段の中で、通話がシャイネス高群においてシャイネス低群よりも選好度が低い傾向がみられた。

次に、早稲田シャイネス尺度を構成する5つの下位因子の各得点と相手毎にコミュニケーション選好度との相関関係を調べた (Table 2)。その結果、因子4 認知<自信のなさ>のみ、友人および目上の人両方で対話の選好度との間、および目上の人との通話の選好度との間で有意な負の相関が認められた。

Table 2 早稲田シャイネス尺度の各因子および合計得点と各コミュニケーション手段の選好度との相関係数

	友人			目上の人		
	メール	通話	対話	メール	通話	対話
因子1	0.00	0.05	-0.05	0.05	-0.04	-0.11
因子2	0.14	-0.02	-0.01	0.06	-0.05	-0.01
因子3	0.09	-0.02	-0.14	0.12	-0.03	-0.14
因子4	-0.02	-0.14	-0.20*	0.02	-0.20*	-0.18*
因子5	0.00	0.05	-0.05	0.05	-0.04	-0.11
合計得点	0.08	-0.10	-0.14	0.06	-0.14	-0.14

* $p < .05$

本研究の結果から、シャイネスの高低にかかわらず、相手が友人であっても対人緊張がより高いと推測される目上の人であっても、大学生はコミュニケーション手段として、携帯電話を用いた通話やメールよりも、対話を基本的に好むことが示された。今回用いたシャイネス尺度の合計で示されるような、対人面での消極性、緊張、過敏、不合理な思考などの諸側面を合わせたシャイネスの度合いについては、この度合いが高ければ、直接対話よりも携帯電話によるメールや通話といった間接コミュニケーションを好むという当初予測した関係は認められなかった。

一方で、シャイネスの下位因子のうち、認知＜自信のなさ＞の因子のみ、コミュニケーション手段の選好との間に有意な相関関係が認められ、自分自身に自信がないと認知する度合いが高いほど、相手が友人、目上の人の方において、対話を避ける傾向があり、さらに加えて、相手が目上の人の場合、通話も避けるという結果が示された。シャイネス尺度の諸因子において、認知以外の行動、感情の因子について、コミュニケーション手段の選好と有意な関係は認められなかったことをふまえると、消極性や緊張、過敏さなどの側面よりも、自己に対する認知の方がコミュニケーション行動に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

本研究の結果から、大学生の対面コミュニケーションへのモチベーションの高さが確認され、大学在学時から卒業後の就労時に至る長いスパンで活用されるようなコミュニケーション能力向上をめざす教育実践の適用が期待されると思われた。また、コミュニケーション・スキルの向上を支援するうえで、自己に

対して自信のない学生については、ポジティブな自己意識の獲得を促し自信を回復するような配慮を加える必要があるだろう。

大学生のコミュニケーション力を含めた社会スキル・トレーニングを講義の一環として行う取り組みは既に試みられており（例えば、大坊・栗林・中野、2000）、シャイネスを含めて詳細な検討が行われた報告もある。後藤・宮城・大坊（2004）は、大学生を対象として社会的スキル向上を目的としたプログラムを週1回程度の割合で9回継続的に展開し、基本的なコミュニケーションの言語・非言語両側面についてのスキルを向上させるためのトレーニングを実施した。トレーニングの前後で、社会的スキルを測定する尺度 ACT 日本語版（大坊、1991）や相川（1991）による特性シャイネス尺度などが施行され、その分析結果から、トレーニングの後で非言語的表出性、察知能力、対人感受性の得点が上昇し、シャイネス得点が減少するという効果が持続することが認められた。こうした先行研究から、コミュニケーション能力の向上とシャイネスの低減との間には何らかの相互作用がある可能性があり、本研究で得られた大学生の対面コミュニケーション手段の選好とシャイネスの特定の因子の関与についての示唆もふまえながら、さらに有効なコミュニケーション・トレーニングの方法を開発することが求められる。

引用文献

- 相川充（1991）. 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究. 心理学研究, 62(3), 149-155.

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition Text Revision*. [高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.]
- Crozier, W. R. (2001). *Understanding Shyness : Psychological Perspectives*. Palgrave Macmillan.
- Crozier, W. R. (2005). Measuring shyness : Analysis of the Revised Cheek and Buss Shyness scale. *Personality and Individual Differences*, **38**, 1947-1956.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野星 (2000). 社会的スキル実習の試み. 北海道心理学研究, **23**, 22.
- 後藤学・宮城速水・大坊郁夫 (2004). 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討—得点変化のパターンにみる参加者クラスタリングの試み—. 電子情報通信学会技術研究報告, **11**, 7-12.
- Lane, C. (2007). *Shyness : How Normal Behavior Became a Sickness*. Yale University Press.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding Social Anxiety: Social, Personality, and Clinical Perspectives*. Beverly Hills : SAGE Publications.
- [生和秀敏 (訳) (1990). 対人不安. 北大路書房.]
- 三浦麻子・大賀暁・土井伸一・山田敬嗣 (2008). 対人コミュニケーションにおけるメディア選好と個人特性. 日本心理学会第72回大会発表論文集, 161.
- 宮本聡介 (2001). 孤独感・シャイネス. 堀洋道 (監), 山本真理子 (編), 心理測定尺度集 I (pp. 214-239). サイエンス社.
- 菅原健介・眞栄城和美・菅原ますみ・天羽幸子・詫磨武俊 (2002). シャイネスが学級内での児童, 生徒の適応に及ぼす影響～学級集団内における不適応を生むのは不安か消極性か～. 日本心理学会第66回大会発表論文集, 153.
- 鈴木裕子・山口創・根建金男 (1997). シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) の作成とその信頼性・妥当性の検討. カウンセリング研究, **30**(3), 245-254.
- 高柳真人・田上不二夫・藤生英行 (1998). 教師のシャイネスに対する評価と対人行動の関連について. カウンセリング研究, **31**(1), 27-33.

付記

本研究は平成19年度北翔大学人間福祉学部教育研究促進費の助成を受けて行われた。本研究の一部は日本心理学会第72回大会（平成20年9月20日，北海道大学）で発表された。

The Relationship between the Preferred Channel of Communication and Shyness in Japanese University Students

Masae KAZAMA

ABSTRACT

The relationships between the preferred channel of communication and shyness were investigated in Japanese university students. Participants were 148 university students who were administered two questionnaires. The first measured the preference for using text messaging, telephone calls, or face-to-face conversation with either of two different communication partners, a friend, or a superior. The second questionnaire was the Waseda Shyness Scale (WSS). The results indicated that there was no significant difference between high and low shyness groups in the preferred communication channel. Irrespective of the degree of shyness, university students preferred face-to-face conversations. Analyses of components of WSS scores indicated that only cognitions about self-confidence had a significant correlation with the preferred communication channel, with participants with low self-confidence tending to avoid face-to-face conversations. These results suggest that university students in general have a high motivation to communicate directly (face-to-face). It is suggested that students lacking self-confidence may benefit from educational support to develop their communication skills.

Key words : shyness, communication channel, university students